

# 「協働」を通じた文化遺産の生成： トルコにおける二つの発掘現場を事例に

田中英資

## 1. はじめに

近年、「文化遺産 (heritage)」の保護は、開発事業や観光といったグローバルな政治経済の動きの中で重要な位置を占めるようになってきている。特に、考古遺跡や歴史的建造物といった過去の痕跡は、国民の過去を表現し国民意識を象徴するものとされるだけでなく、観光資源としても活用される。そのため、トルコやギリシャ、イタリアのような文化遺産をめぐる問題に対する社会的関心が高い国々では、文化遺産とみなされた過去の痕跡の保存・管理と観光開発のバランスを取ることが大きな課題となっている。

文化遺産に関する国内外の先行研究では、文化遺産とされた有形・無形の文化的表現を人々がどのように自らの政治・経済的資源としていくか、利害関係を持つ集団によるそのアプローチの違いに焦点が当たってきた (Breglia 2006; 山村 2007)。トルコにおける先行研究についても、こうした観点から考古学者と発掘現場周辺に暮らす人々の、遺産とみなされた考古遺跡や過去に対する認識の違いが論じられている (Bartu-Candan 2007)。そうした様々な集団による有形・無形の文化的表現へのアプローチの交渉の結果が「遺産」であり、この点で過去の痕跡が遺産化する過程への注目が高まっている (Harrison 2013)。

しかしここで重要なのは、有形・無形の文化的表現は、「文化遺産」とみなされてはじめて、政治・経済的資源として活用される点である。このような形で「文化遺産」の生成を遺産化と呼ぶとすると、遺産化とそれに伴う政治・経済的な資源化の過程では、文化遺産の实在は所与ではないことになる。そして、遺産化の過程とは、特定の文化的表現と人々の間に関係性が生じるなかで、文化遺産がたち現われてくる過程と捉える必要がある。実際、トルコにおける遺産をめぐる問題は、開発事業などで破壊の危機にさらされた過去の痕跡に関心を持った国内外の様々な集団によって「文化遺産」とみなされる。そして文化遺産として保存・管理される過程において、その扱われ方はそれぞれの集団の政治・経済的利害から「問題」として認識されてきた (Tanaka 2013)。

以上をふまえて、本稿では、考古遺跡とそれに利害関係をもつ諸集団（地元民、考古学者など）の関係性に着目しつつ、そうした過去の痕跡が「文化遺産」となっていく過程を検証する。特に、トルコ西南部ブルドゥル県ギョルヒサル市にあるキビュラ遺跡と、トルコ西北部バルクエシル県エルギリ村にあるダスキュレイオン遺跡という二つの都市遺跡で進んでいる発掘調査と遺跡整備事業を事例に、二つの遺跡における、遺産化の過程や遺跡からの出土物とそれらをめぐる地域住民や考古学者との関係性のあり方を、文化遺産とそれに関わる様々な人々（考古学者、地元住民、観光客等）の「協働 (collaboration)」 (Tsing 2005) とみなして検討する。そのうえで、そうした「協働」のなかで遺産化の過程が進行していることを示す。

まず、文化遺産とされたものとその周囲にある諸集団（専門家・地元住民・行政など）との「協働」についての議論をみていく。次に、トルコにおける文化遺産の保護・管理行政の枠組みをまとめたくうえで、キビュラ遺跡とダスキュレイオン遺跡のそれぞれにおける文化遺産の生成過程を、検証することを通して、そのなかでの文化遺産とみなされた遺跡と人々の「協働」のあり方を考察する。

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

## 2. 遺産化の過程における利害集団の「協働」

文化遺産に関する既存研究では、文化遺産とされた有形・無形の様々な文化的な表現の取扱いについての規範となる言説の生産と再生産に関する議論が進展している。アメリカ合衆国やオーストラリアの先住民の権利運動と行政による遺跡管理をめぐる衝突を研究した考古学者ローラジェイン・スミスは、「文化遺産とされるものに正しい定義を与え、そういう定義上の文化遺産の性質や意味について誰が語る能力があるかを定める」支配的な言説に注目した (Smith 2006: 29)。スミスは、そのような支配的な言説のことを「権威化された言説 (authorized heritage discourse)」 (Smith 2006) と呼んでいる。つまり、「権威化された言説」は、文化遺産の扱いに関わる前提である (Smith 2006: 4)。そうした言説には過去から受け継がれてきたものの物質的な側面を重視する西洋の見方が強く反映されている。また、この言説にはそうしたものを扱う考古学者や人類学者のような専門家たちの役割を、「過去についての正当なスポークスパーソン」としてきた (Smith 2006: 29)。スミスはさらに、この「権威化された言説」は、文化遺産とされたものの扱いに関わる、それ以外の様々なアプローチを周縁化してきたことを指摘する。また、こうした「権威化された言説」の働きに注目しなければ、文化遺産とされたものとその周囲にいる様々な集団との間の多様な関係性を説明しきれないと主張する (Smith 2006)。

一方、似たような指摘は、文化遺産に関わる研究を行ってきた人類学者からも出されている。カリブ海のアフリカ系住民の歴史・過去に対する意識を研究してきたカレン・フォグオルウィグは、グローバルな文化遺産に関する言説がローカルな過去に対する語りを周縁化していると論じている (Fog Olwig 1999)。フォグオルウィグがいうグローバルな文化遺産に対する言説は、スミスのいう「権威化された言説」にあたる。特に、フォグオルウィグは、そうした文化遺産に関する捉え方が様々な多様性のあり方のなかからある特定の多様性だけを強調し、それ以外を抑圧する役割を果たすとも論じている

(Fog Olwig 1999 : 377)。

ここで重要なのは、文化遺産についての「権威化された言説」は、文化遺産とされたものに対する特定のアプローチを権威化する中で、そうしたものに対する二つの矛盾するような価値観を内包してしまう点である。これらの一つは、過去から受け継がれてきたものに対して「権威化された言説」によって付与される「文化遺産」としての価値観である。もう一つは、そうしたものを受け継いできた集団独自の価値観といえる。こうした二つの価値観が引き起こす矛盾は、文化遺産とされたものは、それが所属する集団のアイデンティティに関わる象徴的な価値を持っているとされることも関係が深い(参考 Handler 1988)。

まず押さえておくべき点は、過去から受け継がれてきたものを「権威化された言説」に即した文化遺産の保護のあり方で扱ったとしても、それが所属する集団による独自のあるいは「伝統的」な扱い方に合うとは限らないということである。しかし、それにも関わらず「権威化された言説」の権威は、その文化遺産が、それが所属する集団を代表するかのような象徴的な価値を付与する働きがある。そのため、その対象を過去から受け継いできた集団は、自分たち独自の扱い方こそが望ましい文化遺産のあり方と主張することになり、そこに矛盾や対立が生じるのである。さらに、そこでは「権威化された言説」による文化遺産の扱い方において誰がその文化遺産の価値を代表しているのかという問題も生じる。その権威を代表しているのは、すでに述べたように「過去のスポークスマン」たる考古学者や人類学者といった文化遺産の専門家ということになる。このように、「権威化された言説」への注目は、このような文化遺産に関わる「権威化された言説」の構築と文化遺産の専門家たちは共犯関係にあり、彼らの知識こそが「権威化された」文化遺産の解釈となっていることも示してきた (Bryne 2009 ; Fog Olwig 1999 ; Smith 2004, 2006)。

こうした既存研究が明らかにしたことの結果として、文化遺産とされたものに対する多様な解釈が認められるべきであるとされるようになってきてい



「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

る。そのため、考古学者や人類学者といった文化遺産の専門家たちの解釈はそれ以外の利害集団の解釈に優先するという前提は崩れつつある（Meskell 2009；Meskell and Pels 2005；Ashworth et al 2007；関 2014など）。また、文化遺産に対する理解の多様性の認識によって、文化遺産は、単に客体化された何かというよりも、そうみなされた有形・無形の文化的な表現とそれをめぐる諸集団の交渉という社会的なプロセスとして見直されるようになってきている（Breglia 2006；Harrison 2013など）。このことはまた、文化遺産は、過去から受け継がれてきたものをめぐる様々な集団の間の衝突も含んだ相互交渉のなかでたち現われてくるものであることも意味している（Harrison 2013）<sup>1</sup>。

文化遺産が過去の痕跡とそれをめぐる諸集団の相互交渉のなかで構築されると考える場合に有益なのが、アナ・ローウェンハウプト・チンの「協働 (collaboration)」概念である（Tsing 2005）。チンの研究は、南部カリマンタン島の熱帯雨林の開発と保護に関わる、ローカルとグローバルの様々な次元の諸集団（政府、地元住民、環境保護運動家、アウトドア愛好家、材木産業など）の相互交渉のあり様を事例に、グローバル化が進む現代社会においてそうした普遍的とされる価値観がどのようにグローバルな結びつきをつくりだしているのかという点を考察している。彼女は、近年進んでいるグローバル化の過程で UNESCO の「世界遺産」概念のような普遍的とされる価値観は必ずしも世界の画一化を生み出しておらず、そうした普遍的な価値観をめぐって、様々な集団が「摩擦 (friction)」を繰り返すなかで、グローバルとローカルの結びつきが生じていると指摘した（Tsing 2005：4）。

その「摩擦」の働きのなかで彼女が注目したのが「協働」である。ここで言われる「協働」とは、単に同じ目標に向かって一丸となって連携するというわけではなく、立場の異なることもあれば、目的も異にすることも含め、

---

<sup>1</sup> ロドニー・ハリソンは、文化遺産研究において「権威化された言説」への注目が集まるようになった状況を「言説的転回 (discursive turn)」(Harrison 2013)と呼んでいる。

より広い意味で様々な集団が連携することを意味する。つまり「協働」する諸集団は、「目的や成果に対して共通の理解を持っていても、持っていなくてもよい」し、諸集団の立ち位置が異なれば異なるほど互いの目的も異なってくるので、「連携する相手の目的を理解していてもいいし、していなくてもよい」ということになる (Tsing 2005 : 246-247)。

文化遺産とされる過去の痕跡に対して、考古学者や地域住民、観光産業従事者といった様々な集団は、同じ捉え方をしているわけではないし、互いに互いの捉え方を理解しているわけでもない。また、「権威化された言説」と呼べるような政治的影響力の強い捉え方もあれば、政治的影響力の弱い捉え方もある。つまり、遺産化の過程において、そうした様々な過去の捉え方が交錯しながら過去の痕跡が文化遺産となっていく「協働」が生じているとみることができる。

以上をふまえて、トルコにおける発掘調査とその後の遺跡の保存・管理の動きのなかで、遺跡とそれに関わる様々な集団との間にどのような「協働」が生まれているかをみていくことにする。ただし具体的な内容に入っていく前に、トルコ政府による考古遺跡の保存・管理の枠組みについて概観する。また、トルコ政府も文化遺産をめぐる「協働」に関わる集団とみることができるためである。

### 3. トルコにおける考古遺跡の保存・管理についての法的枠組み

トルコの国土の大部分を占めるアナトリアは、新石器時代から1万年以上にわたって東西からの様々な民族がこの地を行き来し興亡してきたという、その地政学的な位置もあって、考古学的にも歴史学的にも「豊か」(Özdoğan 1998) であるといつてよい。また、トルコは、観光産業が国の経済を支える大きな柱となっているといえるが、エフェソス、ペルガモン、イスタンブール歴史地区など、考古遺跡や歴史的な都市などに世界的に知られた国際観光地も多い。トルコ国内には2009年時点でトルコ共和国文化観光省が登録した文

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

化財が約11,400件あり、そのうち7,766件は考古遺跡である（Bonini Baraldi et al. 2013：733）。ただし、数千年にわたって諸民族の交流の場であったアナトリアの歴史を鑑みれば、未だ発見されず、文化財登録されていない考古遺跡の数はさらに増えることも推測できる。このことは2003年に文化観光省が文化財として登録した考古遺跡の数は5,218件であったのに対し、それが2009年には7,766件となっていることからわかる。

こうしたトルコにおける膨大な数の文化遺産の保護・管理に関わる法的な枠組みは、1983年から施行されている文化財・天然記念物保護についての第2863法（*Kültür ve Tabiat Varlıklarını Koruma Kanunu No. 2863* 以下、第2863法）である。この第2863法では、トルコ国内で発見される文化遺産は全て国有であり、国家によって管理されるものであることが規定されている。文化遺産国有の原則は、オスマン帝国末期から受け継がれ、トルコ共和国の建国以来変わらない文化遺産の管理・保護の柱となっている（Eldem 2011；Shaw 2003）。

このように、トルコ政府は文化遺産とされる考古遺跡に関わる協働に重要な役割を果たしている。このトルコ政府による文化遺産の保護・管理の枠組みは、アンカラの中央政府に統括の権限が集中しているという意味では集権的であるといえる。ただその一方で、各地域に置かれた下部組織が保存・管理の実務を握っているほか、文化遺産とされるもののジャンルによって担当する部署が大きく変わってくるという意味では、分節化していると特徴づけられる（Bonini Baraldi et al. 2013：731）。

まず、トルコ政府のなかで文化遺産の保護・管理の中心的な役割を果たしている部局は、観光文化省（*Kültür ve Turizm Bakanlığı*）内に置かれる文化遺産・博物館総局（*Kültür Varlıkları ve Müzeler Genel Müdürlüğü*）である。文化遺産・博物館総局は、首都アンカラにある本部の下にトルコ各地方に98の博物館局（*Müze Müdürlüğü*）を擁している。これらトルコ各地に置かれた博物館局が、登録された文化財の保存・管理、全国188の博物館と129の「史跡（*Ören Yeri*）」の管理・運営、発掘調査の実施・査察に関わる実務

を担っている (Bonini Baraldi et al. 2013 : 731)。他方、観光文化省以外にも、文化遺産の保存・管理に関わる機関がいくつか存在する。特に、文化観光省の文化遺産・博物館総局が主に先史時代からヒッタイト期、古代ギリシャ・ローマ期の文化遺産を扱っているのに対し、文化観光省ではなく、総理府 (*Başbakanlık*) ワクフ総局 (*Vakıflar Genel Müdürlüğü*) は、モスク (イスラーム教寺院) やメドレセ (イスラーム教の神学校) など宗教的建造物を中心に、セルジューク朝やオスマン朝時代の都市部の歴史的建造物の保存・管理について責任を負っている<sup>2</sup>。

トルコ国内の考古遺跡の文化財登録や保存・管理や復元については、文化遺産・博物館総局が定めた国内各地域に置かれた34の「移動不可能な文化遺産及び自然遺産の保存に関する委員会 (*Koruma Kurulu* 以下、保存委員会)」が大きな影響力を持っている。考古学者や建築学、博物館学、都市計画学などの専門家によって構成される保存委員会は、第2863法に基づき、科学的な見地から移動不可能な文化遺産・自然遺産の扱いを決める諮問機関であり、その主たる役割は、文化財として登録された遺跡の保存・復元や遺跡の活用のあり方について答申を出すことにある (第2863法・第51~58条)。考古遺跡の場合は、まず保存対象となる遺跡の範囲 (*sit alanı*) を定め、その中で3つの等級を分けて、土地活用のあり方に制限をつけている。第1級考古学的保存区域 (*birinci derece arkeolojik sit alanı*) と保存委員会が指定した区域では、文化遺産・博物館総局が許可を与えた考古学的発掘調査のような区域の保存につながる活動を除き、建物の建設や、耕作、土砂の採取、

---

<sup>2</sup> ワクフ (トルコ語では '*wakıf*', アラビア語では '*waqf*' or '*wakf*') とは、セルジューク朝期とオスマン朝期にモスクやメドレセなどの建設や維持管理、貧困者の救済など、イスラーム教やチャリティを目的とした土地や建物の寄進のことをいう (T.C. Başbakanlık Vakıflar Genel Müdürlüğü 2011)。ただし、ワクフ総局が管理する建造物は、近年建設されたものも多く、必ずしも「文化遺産」とみなされるような歴史的建造物ばかりではない。

<sup>3</sup> ただし、トイレや見学路など史跡を公園化するにあたり必要な建物の建設は必要な場合にのみ保存委員会の許可があれば可能となる (Antalya İl Kültür ve Turizm Müdürlüğü 2014)。

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

伐採など、保存区域に影響を与えるすべての諸活動が原則として禁止される（Antalya İl Kultur ve Turizm Müdürlüğü 2014）<sup>3</sup>。第2級考古学的保存区域（*ikinci derece arkeolojik sit alanı*）は、遺跡内にすでに建造物が建っている場合で、新規の建物の建設を禁じられるほか、既存の建物についても簡単な修復について保存委員会の許可によって認められる以外は、第1級考古学的保存区域に準じて保存区域に影響を与えるほぼすべての活動が禁じられている（Antalya İl Kultur ve Turizm Müdürlüğü 2014）。第3級考古学的保存区域（*üçüncü derece arkeolojik sit alanı*）では、博物館局による発掘調査を含め、保存委員会の必要な審査を経て、行政からの許可が下りれば、区域内での建造物の建設などが可能になる。このように、遺跡周辺に暮らす人々にとって、保存委員会がどのように保存区域を決めるかが、日常生活に大きな影響を及ぼすことになる（Antalya İl Kultur ve Turizm Müdürlüğü 2014）。

考古遺跡における発掘調査も、第2863法によって定められた手続きをふまえて文化遺産・博物館総局による審査を受け、許可を得る必要がある（第2863法・第35～41条）。発掘調査が行われている期間中も、各地の博物館局から査察官が発掘現場に1名派遣されている。査察官は発掘の開始から終了まで現場に滞在し、発掘調査の進行状況をアンカラの文化遺産・博物館総局に報告している。また、保存区域内で規定に違反した土地利用が行われている場合に違反者を告発することもある。査察官は2年から3年おきに同じ発掘現場に派遣されることが多い。なお、後述するように、発掘現場に派遣される査察官は必ずしも勤務する国立博物館近隣の遺跡に派遣されているわけではない。

今まで述べてきたように、アナトリアの過去を示す考古遺跡は、第2863法に基づいて文化遺産として国有化され、中央政府の集権的な枠組みのなかでその保存と管理が行われている。そのような形で中央政府が遺産化の過程へ関与する一方で、発掘現場で調査する考古学者や周辺に暮らす地域住民はどのような動きを見せているのか、二つの考古遺跡の事例から見ていくことにする。

#### 4. 考古学者と地元住民との関係

本章では、筆者が現地調査を行ったブルドゥル県ギョルヒサル市にあるキビュラ遺跡と、バルクエシル県エルギリ村にあるダスキュレイオン遺跡という二つの都市遺跡を事例に、考古遺跡に関わる様々な集団の「協働 (collaboration)」のなかでどのように遺産化の過程が進行しているかをみていく<sup>4</sup>。特に、それぞれの遺跡の周辺に暮らす住民の遺跡に対する捉え方が、考古学者との関係にどのような影響を及ぼしているかに着目する。

図表 1 キビュラ遺跡とダスキュレイオン遺跡



##### 4-1：遺跡の観光資源化への期待

2014年2月半ば、地中海に面したリゾート地フェティエから、キビュラ遺跡のあるギョルヒサル市に向かおうとした時のことだった。バスターミナルでギョルヒサル行のチケットを買おうとしたところ、バス会社のカウン

<sup>4</sup> キビュラ遺跡へは2013年8月に初めて訪問し、2014年2月にも現地調査の下見のため遺跡のあるギョルヒサル市を訪問している。そのうえで、2014年8月（3日間）に実施している。

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

ターにいた男性は、ギョルヒサルにでかける外国人なんてありえないといった様子で、「デニズリ行きの間違いではないのか？」と何度も聞き返してきた。デニズリの近郊にはユネスコ世界遺産に登録されている国際的な観光地ヒエラポリス・パムッカレがある。2月はトルコの観光産業においては閑散期にあたり、ただでさえ観光客が少ない時期である。フェティエのような地中海のリゾート地では閉店してしまうホテルやペンションも多い。バス会社のカウンターの男性は、東洋系の外国人とわかる外見の筆者は、行先を勘違いしている旅慣れない観光客と思ったのだろう。また、乗り込んだバスの中では、乗客だけでなく乗務員も筆者のことを物珍しそうに眺めていた。

ギョルヒサル市は、トルコ地中海地方ブルドゥル県の西南部に位置する人口約2万人の小さな地方都市である。ホテルやペンションも数軒はあるものの、「地球の歩き方」や「Lonely Planet」のような主要な観光ガイドブックには掲載されておらず、国際観光という観点ではほとんど知られていない。ギョルヒサルへは近隣の主要都市（デニズリ・アンタルヤ・フェティエ）などからバスで向かうことになるが、上述のように外国人旅行者がギョルヒサルに向かうバスに乗り込むことは珍しがられるくらいである。ギョルヒサル市内で外国人を見かけることもほとんどない。現在、ギョルヒサルで外国人をみかけるとしたら、多くの場合、発掘調査に参加あるいは見学にきた外国人考古学者であり、ごくまれにトルコ地中海の遺跡めぐりをしている考古学好きな外国人観光客ということになるだろうが、それも基本的には発掘が行われている夏の時期（7月～9月）に限られるといえるだろう。

キビュラは、ギョルヒサル市街地を見下ろす3つの山に築かれた都市の遺跡である。第1級考古学的保存区域に指定されているエリアは、ギョルヒサルの人々の市街地から外れており、遺跡内に民家等はない。ローマ帝国初期の地理学者ストラボンによれば、キビュラはリディアから移住してきた人々によって建設され、リキア、カリア、ピシディア、フリギアの4つの地方の交わる地点に位置することから繁栄していたとされる。また、当初は18キロ離れたギョルヒサル湖の湖畔に都市が築かれていたが、その後、都市は現



在の位置に移転した（T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı Mehmet Akif Ersoy Üniversitesi 2010）。

キビュラは紀元前3世紀にはペルガモン王国の支配下にあったが<sup>3</sup>、紀元前2世紀から1世紀にかけて周辺の三つの都市と四都市同盟（*Tetrapolis*）を組んで政治的な独立を果たし、同盟の盟主として君臨していた（T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı Mehmet Akif Ersoy Üniversitesi 2010）。紀元前1世紀には、ローマ帝国の支配下となった。

キビュラ遺跡の本格的な発掘は、ブルドゥル博物館とアクデニズ大学の共同プロジェクトとして2006年に開始された（Ekinçi et al 2006）。2009年からはブルドゥル市にあるメフメット・アキフ・エルソイ大学による発掘調査が続けられている。これまでに、競技場、劇場、音楽堂（オデオン）とその脇の浴場、市場（アゴラ）、市場に続くメインストリート、墓地（ネクロポリス）で発掘が行われてきた。2009年には議事堂としても使われていた音楽堂の床面から保存状態の良いメドゥーサのモザイクが発見されている（図表2）。また、2012年には、議会なども行われていた音楽堂の玄関前を飾っていた560平方メートルに及ぶ巨大なモザイクの床面が出土し、音楽堂の建物と合わせて、2014年度までに修復・復元が行われた（Arkeolojihaberler.net. 2012, 図表3）。また、音楽堂脇の浴場は、浴室の仕組みが分かる形で復元作業が終了し、見学が可能な状態になっている。2014年の時点では、発掘当初から続いている市場（アゴラ）の発掘のほか、二か所で墓地の発掘が行われている。また、発掘の終了している競技場については復元整備も計画されているが、現時点ではその資金源となる助成金が得られていない状況である。

市内から遺跡に到る登り坂の途中、第1級考古学的保存地区内に入っすぐのところに発掘調査隊の宿舎が建てられており、ここが発掘調査団の拠点となっている。宿舎には図書室や出土品の記録や復元を行うための作業場、出土品を納める倉庫なども設けられている。発掘調査は、大学の夏休みの時期にあたる7月から9月初めまで行われる。2014年度の発掘調査団は、筆者が調査していた8月下旬の時点では調査団長を含めて考古学者が5名（この



「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

うち復元と修復の専門家がそれぞれ1名）、遺跡整備の専門家1名、碑文学の専門家1名に、大学院生と学部生が約20名、地元住民から雇われた作業員が約15名の、約40名で構成されていた<sup>5</sup>。これに、2014年度はアンカラのアナトリア文明博物館から派遣された査察官が1名おり、宿舎における炊事や掃除、洗濯をしてもらうために雇われた地元住民の女性が3名働いていた。考古学者や学生は宿舎に寝泊まりするが、地元住民から雇われている人々は自宅から発掘現場まで通ってきていた。

発掘は午前7時から始まり、発掘のグループ、記録・修復のグループに分かれて作業がはじまる。作業員として雇われている地元住民は、発掘作業で出た土砂を運搬する者や、技能を生かして修復に関わる者、クレーン操作を行う者など役割が分かれており、現場を指揮する考古学者や大学院生の指示に従って動いている（図表4）。発掘作業は休憩や昼食を挟みながら、午後4時に終了する。作業員として雇われた地元住民はそれぞれに帰宅する。大学院生や考古学者は、その後も現場に居残って調査を続けることもあるが、多くは作業の終了とともに宿舎に戻り、軽食の出る休憩時間の後は、宿舎で出土物の整理や記録といった作業を行っている。夕食も宿舎で出される。夕食後は自由時間となる。宿舎に卓球台があるほか、個人的な買い物に市内まで出かける者もいる。また有志が市内の運動場や体育館に出かけてサッカーやバレーボールを楽しむこともあるが、発掘調査団は、必要がなければ市内に出ることはほとんどない。また、発掘作業のために通ってくる地元住民の作業員とも、特に親しくしているわけではない。

このように、発掘調査の日常では、ギョルヒサルの地域住民との交流は限られているといえる。その一方で、発掘調査に関わる考古学者たちは、地域住民との関係は良好だと話す。8月の時期はギョルヒサル周辺では結婚式が

---

<sup>5</sup> 発掘調査団の人数は、その年度の発掘助成金の獲得状況によって変動しており、キビュラ遺跡の発掘でも、多い時には約70人が発掘に参加している。また、特に学生の参加については時期によっても変動がある。筆者が訪問した8月下旬の時期には、一部の学生はすでに調査団から外れていた。

続く時期であるが、地域住民が発掘調査団を結婚式に招くということもある。また、野菜や果物などの差し入れが届くこともあるという。この背景には、ギョルヒサルの人々にとって、キビュラ遺跡がギョルヒサルの観光資源になりうるとの期待があると考えられる。特に、ギョルヒサル市は、そのウェブサイトの中で、キビュラ遺跡のイメージを多用し、遺跡を市のシンボルとして活用するようになっている（Göhlisar Belediyesi 2014）。また、ギョルヒサルで硝子業の会社を営んでいるI氏は発掘調査団のメンバーで復元の専門家U氏とともに、キビュラ遺跡の復元を請け負う会社を設立し、2014年度の発掘に関わるようになった。I氏は一方で、遺跡発掘の進展による観光振興を見据え、ギョルヒサル市内用地を買収し、ホテルの建設計画も進めている。I氏は、キビュラ遺跡の発掘が進むことでギョルヒサルは今後観光業が発展すると期待する。

ただし、キビュラ遺跡に限らずほとんど全ての都市遺跡の発掘調査について当てはまることであるが、キビュラ遺跡は広大な都市遺跡であり、発掘が行われているのはそのごく一部に過ぎない。本格的な発掘調査が始まったの

**図表 2** 音楽堂で発掘されたメドゥーサのモザイク画  
(2013年8月撮影)



「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

**図表 3** 修復・復元された音楽堂と玄関前のモザイク画  
(2014年 8月撮影)



**図表 4** 発掘作業の様子 (2014年 8月撮影)



も2006年と最近である。そのため、音楽堂や劇場など発掘が行われた箇所に説明版は設置されているものの、見学路の整備や遺跡公園としての整備はほとんど進んでいない。遺跡の出入り口には料金所やトイレなども整備されておらず、遺跡自体も、発掘調査が行われていない時期は閉鎖されている。実際のところ、地元住民が、遺跡で発掘調査の行われている時期に遺跡見学に訪れることは非常に少ない。

それでも、発掘に関わっている考古学者の中には、観光資源として遺跡を活用できるかもしれないというギョルヒサルの人々の期待を、ある種のプレッシャーのように感じている者もいる。先述のI氏と復元の請負会社を立ち上げたU氏は、「地元住民の期待に応えることはとても重要なことになっている。」と話した。発掘調査自体は地道なもので、毎年度大きな発見が期待できるものではない。また、そもそも考古学的には意義のある発見が、必ずしも地域住民の期待するような観光振興につながるものとは限らない。しかし、トルコ国内外の関心を集めるような遺跡からの「大発見」がなければ、地元住民の期待は裏切られ、発掘調査団との関係も変化するのではないかと懸念しているのである。

このように、キビュラ遺跡において考古学者と地元住民の関係は一見すると良好なようにみえる。一方で、その関係性は確固たる信頼関係というよりも、遺跡から何が出土するかに左右されている面がある。今後の発掘の進展そのものが、いかに地元の期待する観光振興につながるかが、両者の関係性に大きく影響する可能性がある。

#### 4-2：城壁か、農業か、墓場の「財宝」か

トルコの玄関口イスタンブルから高速フェリーに乗り、マルマラ海を渡ると、バルクエシル県のバンドゥルマ市に到着する。そこからさらに車で20分ほど南下すると、ダスキュレイオン遺跡のあるエルギリ村に到着する。エルギリ村は、270種類以上の渡り鳥の営巣地として知られ、「鳥たちの天国 (Kuş Cenneti)」という名前の国立公園となっているマニヤス湖の南西の湖畔に位

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

置している。村の人口は約500人である。村の東西に延びる一本のメインストリートに沿って二つの地区 (*mahalle*) があり、それぞれの地区に一つのモスクがある (図表5)。モスクや商店などはすべてメインストリート沿いに集まる単純な構造になっている。二つの地区は、トルコ系の人々が多く住む地区とチェルケズ人の多く住む地区と分かれている。西側のチェルケズ人の集まる地区では、現在では高齢者に限られるようであるが、かつてはチェルケズ語がよく話されていたという。それぞれの地区には村の男性たちが集まるカフェが1軒ずつあり、ペンションやホテルなどはない。村の主たる産業は農業と牧畜業で、養鶏場や養蜂場もある。

この村の特徴は、トルコ系であれ、チェルケズ系であれ、19世紀末から20世紀のはじめにかけてバルカン半島からアナトリアに移住してきた人々の子孫が現在の村の人口の大部分を占めているという点である。移住してきた人々を先祖とする人々は、自分たちのことを「移民 (*muhacir*)」と呼び、それ以前から村にいた人々である「農民 (*manav*)」と区別している。「移民」は1887年から村に移住しはじめ、1891年に現在のブルガリアから移住してきた人々が特に多かったという<sup>6</sup>。

ダスキュレイオンは、エルギリ村の家々が集中する区域のすぐ西側にあるヒサルテペ (*Hisartepe*) と呼ばれる丘にその城市があった。ただし、村の人々はヒサルテペのことを「城 (*kale*)」と呼ぶことも多い<sup>7</sup>。マニヤス湖に面したヒサルテペの城市部分は、第1級考古学的保存区域に指定されている。最古の遺物は、先史時代の2000年前～3000年前にさかのぼるものが出土している (Daskyleion 2015)。しかし、この遺跡を特徴づけるのは、限られた範囲のなかで異なる時代の城壁が出土している点である (図表6)。紀元前8

<sup>6</sup> 「移民」のエルギリ村への移住が増えた時期は、1878年のサンステファノ条約によってブルガリアがオスマン帝国から事実上独立した時期に重なる。

<sup>7</sup> ヒサルテペ (*Hisartepe*) とはトルコ語で「城 (*hisar*) のある丘 (*tepe*)」という意味であり、地域住民はこの丘のことを「城」を意味する別の単語 (*kale*) を使って表現していることになる。

世紀半ばにフリギヤ人が居住していた痕跡があり、その時代の城壁が出土している。また、古代の記録によれば紀元前7世紀半ばにリュディア王ギュゲスによって都市が建設されたとされ、リュディア時代の城壁も発見されている（Daskyleion 2015）。さらに、ペルシアの衰退後にギリシャ人がこの地を支配するようになった際に築かれた城壁も発見されているためである（Daskyleion 2015）。なお、紀元前6世紀にはリュディア王国を滅ぼしたアケメネス朝ペルシアの支配下に入ったが、この地域のサトラップ（太守）の所在地となって政治・軍事上の重要性を帯びるようになった。そのため、都市にはアケメネス朝期に信仰されていたゾロアスター教の聖域の跡も発見されている（Daskyleion 2015）。こうした点でこの遺跡の学術的重要性は非常に大きい。

ただし、ダスキュレイオン遺跡には、エフェスやペルガモンなどのように観光地となっている遺跡に多く見られる競技場や劇場跡のような大きな建造物の遺構は残っていない。そうした視覚的に「目立つ」過去の痕跡に比べると、時代の異なる城壁やゾロアスター教の聖域の跡など、ダスキュレイオン遺跡において考古学的に意義のある過去の痕跡は、「地味」な遺構と比べてよいかもしれない。

ダスキュレイオン遺跡の発掘が始まったのは、1950年代である。1952年にドイツ人考古学者クルト・ビッテルがエルギリ村のヒサルテペこそ、古代の記録に登場するダスキュレイオンであることを突き止めると、当時のトルコを代表する考古学者の一人であったエクレム・アクルガルが遺跡の発掘を開始し、1960年まで発掘調査を続けた。この結果、アケメネス朝期のサトラップの所在地であった痕跡を発見している（T.C. Balıkesir Valiliği İl Kültür ve Turizm Müdürlüğü 2011）。その後、1988年に発掘調査が再開され、現在ではムーラ大学を中心とした発掘調査団が発掘を継続している。なお、ヒサルテペは1981年に第1級考古学的保存区域に指定されている。

発掘調査団の宿舎は、廃校になった小学校を改装したもので、ヒサルテペとは正反対の村の東側にある。ヒサルテペまでは徒歩で15分ほどかかるため、



「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

調査団のメンバーは自動車によって移動していた。調査団の規模は、考古学者や修復や遺跡公園整備の専門家6名に学生がフェティエ考古学博物館から派遣された査察官、エルギリ村周辺で作業員として雇われた住民の約50名であった。キビュラ遺跡と同様、早朝から午後16時ごろまで発掘作業に従事した後、宿舎に戻り、休憩や食事を取りつつ、22時過ぎまで出土物の記録・整理が行われていた。2014年度の発掘では、ヒサルテペでの発掘に加えて、そこから村に向かって5分ほどの地点で発見された墓地の発掘が行われていた（図表7）。

発掘調査団の考古学者たちは、エルギリ村の住民との関係はよくないと話す。その要因のひとつとして、考古学者たちはダスキュレイオン遺跡とその発掘調査が村の主産業である農業を拡大させていきたい住民にとって障害になっていることを挙げる。例えば、第1級考古学的保存区域に指定されているエリアの中にも養鶏場や農場があるが、それらの所有者たちは、第1級保存区域内にあるために、自分たちのビジネスを拡大することができないことに不満が募らせているという。また、トルコ政府水道局（*Devlet Su İşleri*）はマニヤス湖からエルギリ村に農業用水路を引く計画があるが、その計画では、ダスキュレイオンの歴史的意義を示す城壁の一部に影響がでる恐れがあることから、考古学者は強く反対している。このことも農業の拡大を求める村の住民の不満を生んでいるという。

一方、村長（*muhtar*）をはじめとする村の住民は、「発掘に関わる情報がほしい」と話す。彼らは遺跡に全く関心がないわけではないが、発掘調査をしている考古学者たちが何をしているのかがわからないという主張である。しかし、考古学者たちは彼らの関心は必ずしも遺跡の考古学的意義にはなく、出土する遺物の金銭的な価値にあると考えている。ダスキュレイオンの政治的・宗教的な機能の遺構はヒサルテペ周辺に集中しているが、考古学者たちはヒサルテペから村の中心に向かっては、古代の墓地が広がっていたと考えている。実際、かつて村内には「墓場」と呼ばれる場所があったという。そのため、考古学者たちは村の住民が地下に古代の墓場が眠っていることを知

れば、住民たちの間で自分の家の庭を掘り返す「宝探し」が横行するのではないかと考えているのである。トルコでは遺跡への盗掘の横行が大きな問題となっていることも背景にあり（参考 Tanaka 2010）、発掘に従事する考古学者と地域住民に対して十分な信頼関係を築くことが難しい状況が生まれているといえる。

こうした状況を打破しようという動きもある。発掘調査団に参加し、遺跡の公園整備計画を担当している専門家は、2014年8月に村の女性たちを招いて、発掘調査に対する意見を集めるワークショップを開催した<sup>8</sup>。このワークショップには15人ほどの女性が参加し、発掘現場の見学や、発掘現場で働くことを希望したとのことである。このような取り組みはまだ始まったばかりであるが、活動の進展のなかで、エルギリ村の住民と考古学者との間で遺跡や文化遺産に対する認識のすり合わせが行われていけば、考古学者の関係性に変化をもたらす可能性があるだろう。

図表 5 エルギリ村のメインストリート（2014年8月撮影）



<sup>8</sup> エルギリ村を訪れたのはこのワークショップが実施された後だったため、ワークショップの様子を見学することはできなかった。



図表6 リュディア時代の城壁（2014年8月撮影）



図表7 ヘレニズム時代の城壁付近での発掘の様子（2014年8月撮影）



## 5. 遺産化の過程における「協働」と出土物

今まで見てきたように、キビュラ遺跡とダスキュレイオン遺跡の事例では、遺跡を発掘する考古学者と遺跡周辺に暮らす地域住民との関係性が対照的である。こうした関係性の違いは、政府が指定する保存区域に地域住民の生活の関わり方の違いや、遺産化の対象である過去の痕跡に対する捉え方の違いなどから生じている。

まず、キビュラ遺跡では、地域住民と考古学者の関係は良好である。その背景として、特に地域住民にとって遺跡はギョルヒサルの潜在的な観光資源とみなされており、発掘の進展によって観光振興が期待されていることが大きい。さらに、住民が遺跡を潜在的な観光資源とみなせることの背景には、キビュラ遺跡がギョルヒサルを見下ろす丘の上という、地域住民の生活には直接かわりのない場所にあることも無関係ではない。土地利用が厳しく制限される第1級考古学的保存区域に指定されたエリアは、地域住民の生業とはほとんど関わらないためである。そのため、キビュラ遺跡での発掘調査の進展は、ギョルヒサルの人々にとってはこれまでの生業か、観光かという選択ではなく、単に新たな産業としての観光振興による恩恵を受けられる可能性を持つことになる。ただし、観光振興への期待は、遺跡から何が発掘されるかにかかっている。発掘調査を考古学者たちは、学術的価値とは必ずしも一致しない、観光資源的価値のあるものを発掘しなければならないということ意識している。

反対に、ダスキュレイオン遺跡の場合、遺跡の上にエルギリ村があることは、地域住民と考古学者との関係を悪くさせているといえるだろう。特に、第1級考古学的保存区域に指定されたエリアは、エルギリ村の住民の生業である農業・牧畜の用地に重なっている。そのため、遺跡保存のために住民の土地利用は様々な制約を受けることになる。それが発掘調査による地域住民の反発を招いている。彼らの生業は農業・牧畜であり、少なくとも現時点では、住民の間では、遺跡とその発掘調査は、生活の障害となっているのであ

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

る。ただし、それが地域住民たちの遺跡に対する「無関心」を意味するものではないことには注意する必要がある。ダスキュリオン遺跡の発掘を行う考古学者たちが村の地下に眠っていると考えられている古代の墓地の「盗掘」を懸念していることから分かるように、地域住民たちのなかには、観光資源というよりも「財宝」という捉え方で遺跡をみている者も多い。

このように、キビュラ遺跡とダスキュレイオン遺跡における遺跡と地域住民の生活の関係性の違いは、遺産化の対象としての遺跡に対する彼らの捉え方の違いを生んでいる。また、いずれの場合も、考古学者たちの遺跡に対する捉え方も異なっている。つまり、この二つの事例において、遺産化の過程は様々な利害集団の遺跡に対する異なる捉え方を残したまま進行しているといつてよい。

ここで重要なのは、こうした遺産化における様々な利害集団の「協働」において重要な役割を果たしているのは、発掘によって出土したものだという点である。キビュラ遺跡では、音楽堂から発掘されたメドゥーサのモザイク画が遺跡のシンボルとしてギョルヒサル市に活用されつつあり、発掘調査の進展は、観光振興と結びつけられて期待されている。しかし、発掘調査を進める考古学者はそうした「発見」の重要性を認識しつつ、その難しさも自覚している。ダスキュレイオン遺跡の場合、現時点では遺跡のシンボルとなる「目立つ」遺構や遺物はない。時代の異なる城壁や、ペルシア帝国の太守の拠点であったこと、ゾロアスター教の聖域跡といった遺跡の歴史的重要性は地域住民になかなか浸透していない。その一方で、一部の住民の間で村の地下にある墓場の「財宝」に関心が強いと考古学者が懸念しているということは、そうした住民の間では遺跡から出土するものに対して歴史学的・考古学的価値とは別の経済的価値が意識されていることを意味する。また、遺跡を文化遺産ではなく「財宝」とみているという意味では、地域住民のダスキュレイオン遺跡に対する関心も、遺跡から何が出土するかに左右されているのである。

近年の文化遺産研究では、人類史上の悲惨な出来事を伝える戦争や民族・

宗教対立による虐殺などの痕跡を「負の遺産 (difficult heritage)」とみなす動きや、そうした「負の遺産」を通じた記憶の継承に関わる研究が進んでいる (MacDonald, 2009 ; Logan and Reeves 2009など)。特に戦争の痕跡や記念碑が戦争の記憶をどのように表象するかということが議論されてきた。そのなかでも、「負の遺産」とされたものの物質的な影響が人々の関係性にどう影響するかという点は、本稿が扱ってきた遺産化の過程における「協働」のあり方を考えるうえで示唆的である考える (参考 Harrison 2013 : 222-223)。本稿で取り上げた二つの遺跡の事例においても、発掘を通して出土したもの、あるいは発掘が進めば出土すると考えられるものが、遺跡に関わる利害集団の遺跡に対する捉え方を左右しているからである。発掘を通して遺跡から出土したものは、遺跡に関わる利害集団を動かす。出土したものにどのような価値を見出すかはそれぞれの集団によって異なるが、出土したものを通して彼らは結び付けられ、協働を呼び起こしているといえる。

## 6. おわりに

本稿では、発掘調査とその後の遺跡の保存・管理の動きと、観光開発も含めた地域の人々の遺跡への関わり (遺跡周辺の土地利用のあり方) が、互いにどのような影響を与えているかを検討してきた。特に、キビュラ遺跡とダスキュレイオン遺跡の事例を比較することを通して、保存区域を指定する中央政府、考古学者、地域住民といった遺跡の遺産化に関わる集団の「協働」において、遺跡から出土するものが果たしている役割の大きさを明らかにした。

遺跡から発見された出土品に、地域住民や発掘調査の進展が左右されていることは、遺産化の過程における「協働」は、文化遺産に関わる利害集団の間だけでなく、そうした集団と文化遺産とされた過去の痕跡との間でも、双方向的に進展していることである。別の言い方をすれば、そうした協働のなかで、様々な集団の過去の捉え方が交錯し過去の痕跡が文化遺産となってい

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

くだけでなく、過去の痕跡それ自体もそれに関わる利害集団を形づくる役割を果たしているということである。このことは、「権威化された言説」への注目にみられるように既存の文化遺産研究の中では文化遺産に利害を表明する集団に焦点があたってきたが、遺産化の対象となるものの役割の重要性にも注目する必要があることを示している。

なお、キビュラ遺跡にせよ、ダスキュレイオン遺跡にせよ、観光資源化以前に遺跡の公園化にはほとんど手がつけられていない。時間はかかるがより長いスパンでこれらの遺跡の発掘調査の進展とその後の遺跡の公園化、遺跡を活用した観光振興の進展などの経年変化をみていくことで、遺産化の動態を明らかにしていきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、2014年8月に実施したトルコでの現地調査は、JSPS 科研費26870789の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Antalya İl Kültür ve Turizm Müdürlüğü. 2014. Sit Alanları Koruma ve Kullanma Koşulları <http://www.antalyakulturturizm.gov.tr/TR,67605/sit-alanlari-koruma-ve-kullanma-kosullari.html> (2014年12月24日閲覧)
- Arkeolojijahaberler.net 2012. Kibyra Antik Kenti'nde 1700 Yıllık 560 Metrekarelik Dev Mozaik <http://arkeolojijahaber.net/2012/07/09/kibyra-antik-kentinde-1700-yillik-560-metrekarelik-dev-mozaik/> (2014年12月31日閲覧)
- Bonini Baraldi, S., Shoup, D., and Zan, L. 2013. "Understanding Cultural Heritage in Turkey: Institutional Context and Organizational Issues," *International Journal of Heritage Studies* 19 (7): 728-748.
- Bartu-Candan, A. 2007. Remembering a 9000 Years Old Site. Presenting Çatalhöyük. In E. Özyürek (ed.), *Politics of the Public Memory in Turkey*, Syracuse: Syracuse University Press, 70-94.
- Breglia, L. 2006. *Monumental Ambivalence: the Politics of Heritage*, Austin: University of

- Texas Press.
- Bryne, D. 2009. Archaeology and the Fortress of Rationality. In L. Meskell (ed.) *Cosmopolitan Archaeologies*, edited by L. Meskell, Durham and London: Duke University Press, 68-88.
- Daskyleion 2015 Ana Sayfa <http://daskyleion.mu.edu.tr/> (2015年1月5日閲覧)
- Ekinci, H., A. Özüdoğru, Ş., Dökü, E., Tiryaki, G. 2006. *Kibyra Kazı Çalışmaları 2006* <http://www.burdurmuzesi.gov.tr/2006%20Kibyra%20kaz%C4%B1%20raporu.pdf> (2014年12月31日閲覧)
- Eldem, E. 2011. "From Blissful Ignorance to Anguished Concern: Ottoman Perceptions of Antiquities, 1799-1869." In Z. Bahrani, Z. Çelik, and E. Eldem (eds) *Scramble for the Past: A Story of Archaeology in the Ottoman Empire, 1753-1914*, Istanbul: SALT, 282-329.
- Fog Olwig, K. 1999. The Burden of Heritage: Claiming a Place for a West Indian Culture. *American Ethnologist* 26 (2), 370-388.
- Göhlhisar Belediyesi 2014. *Göhlhisar Belediyesi Ana Sayfa* [www.golhisar.bel.tr](http://www.golhisar.bel.tr) (2014年12月26日閲覧)
- Handler, R. 1988. *Nationalism and the Politics of Culture in Quebec*, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Harrison, R. 2013. *Heritage: Critical Approaches*. London: Routledge.
- Logan W. and Reeves, K. (eds) 2009. *Places of Pain and Shame: Dealing with 'Difficult Heritage'*, London and New York: Routledge.
- MacDonald, S. 2009. *Difficult Heritage: Negotiating the Nazi Past in Nuremberg and beyond*, London and New York: Routledge.
- Meskell, L. 2009. *Cosmopolitan Archaeologies*, Durham and London: Duke University Press.
- Meskell, L. and Pels, P. (eds) 2005. *Embedding Ethics*, Oxford and New York: Berg.
- Özdoğan, M. 1998. "Ideology and Archaeology in Turkey." In L. Meskell (ed.) *Archaeology Under Fire: Nationalism, Politics and Heritage in the Eastern Mediterranean and Middle East*, London: Routledge, 111-123.
- 関雄二 2014 『アンデスの文化遺産を活かす：考古学者と盗掘者の対話』京都：臨川書店
- Shaw, W. M. K. 2003. *Possessors and Possessed: Museums, Archaeology, and the Visualization of History in the Late Ottoman Empire*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Smith, L. 2004. *Archaeological Theory and the Politics of Culture*, London and New York: Routledge.
- . 2006. *Uses of Heritage*, London and New York: Routledge.
- Tanaka, E. 2010 The Idea of Place in the Protection of Cultural Heritage: in the Case of Claims against the Illicit Transaction of Antiquities from Turkey. *Japanese Review of*

「協働」を通じた文化遺産の生成：トルコにおける二つの発掘現場を事例に（田中）

*Cultural Anthropology* 11, 25-46.

——. 2013. Cultural Heritage Issues in Turkey and the Category of 'Europe': Roman Mosaic Collections Discovered in Zeugma, Southeast Turkey. *Senri Ethnological Studies* 81, 149-168.

T.C. Balıkesir Valiliği İl Kültür ve Turizm Müdürlüğü 2011. *Daskyleion Güney Marmara'da bir Phryg-Lydia ve Pers Yerleşimi*, Balıkesir : T.C. Balıkesir Valiliği İl Kültür ve Turizm Müdürlüğü

T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı Mehmet Akif Ersoy Üniversitesi 2010 *Kibyra*, Gölhisar: Gölhisar Belediyesi.

山村高淑他（編）2007年『文化遺産と地域振興－中国雲南省・麗江にくらす』京都：世界思想社

トルコの法令：

No. 2863 Kültür ve Tabiat Varlıklarını Koruma Kanunu（文化財・天然記念物保護についての第2863法）トルコ共和国 1983年7月21日